

# 人獸交渉史

## ——狼と塩——

菱川晶子

### 一、はじめに

線路への置き石が、カラスのいたずらであったという話題は記憶に新しいところだろう。ゴミあさりを始め、増え過ぎたカラスとの様々な葛藤は近年問題になってきている。また、クマやサルの人家近くへの出没、かつては見られなかつた地域でのイノシシやシカの

畑荒らしなどを耳にするにつれ、従来とは微妙に異なる「人と動物との葛藤」が起きていることを感じる。

ここで、これまでの日本人がどの様に動物と接していたのかを考えてみるのは意味があるだろう。自然界の動物と、比較的うまく調和を保ちながら生活をしていた人々の声から、学ぶことは多いはずである。中でも、今世紀日本列島で絶滅した唯一の野生大型哺乳類と見られている狼に注目したい。この、狼にまつわる伝承を考察することは、日本人と動物との付き合い、ひいては日本人の動物観を考える上で有効であると思われる。

一九〇〇五年に奈良県吉野郡で捕獲されたオオカミが、本州最後の二ホンオオカミと見られている。また、北海道に生息したエゾオオカミも一九世紀末に絶え、日本から野生のオオカミは姿を消していく。しかし、絶滅から一世紀近く経つ現在でもオオカミを見たという報告は後を絶たず、一九九三年には森林生態系の保護を目指し、オオカミの復活を唱える日本オオカミ協会も発足している。このように、オオカミは現代でも人々の注意を引く存在であり、日本では「忘れられた狼」とはならないようだ。

オオカミの絶滅については、狂犬病を始め幾つかの要因が絡んで

いるものと思われるが、それは他へ譲り、ここでは人が狼をどの様に見ていたのかを民間説話に求めたい。

日本で語られる狼をめぐる民間説話には、大別すると、「狼の眉毛」・「鍛冶屋の婆」・「狼報恩」・「古屋のもり」の四つ<sup>(注3)</sup>がある。特に前の三話は狼を中心として語られているもので、「狼の眉毛」からは狼の恐怖心が推察され、「狼報恩」はそれら両方の要素を含みながら、人と狼の交渉が最も素朴な形で伝えられているものといえる。

今回は、これらのきちんと完結した狼説話とは異なり、狼報恩譚に見え隠れするようにして語られる、「狼と塩」にまつわる世間話や俗信を取り上げ、日本人と狼の関係について探りたいと思う。なお、資料中、「狼」や「山犬」といった名称が出てくるが、この狼と山犬とを全く異なるものと明確に分けることはできないため、ここでは同一のものとして見做すこととする。また、本稿では、特にニホンオオカミについての伝承を取り扱う。このため資料は本州・四国・九州からのものによることをお断りしておく。

## 二、送り狼

事例1、送り狼（長野県長野市安茂里）

昔なあ、この安茂里に送り狼がいたそな。あるとき村の衆が夜おそ一く町からの帰り、長安橋をすぎた頃何となく変な予感があるので、おそるおそる後ろを振り向くと、暗闇の中に狼がのっ

そんのっそんとついてくるのがぼんやり見えるんだって「あつ、送つてきているなあ」と思うと大の男もほんとうにひや汗は出るし、体は固くなるし、その上足がからまつて思うように進まないんだそうな。狼が後ろからついてくるとき、ころんだら狼にかみつかれ、食い殺されてしまうといわれているので、ころばないようの一歩一歩気をつけ、家へ急いだそな。向うに家の灯が見えた時はそりやーうれしかったそな。家につくとすぐに家のもんにつげるんだって、「今夜はおくり狼に送られちゃつたから早くにぎりめしを作つて、礼を言つてお帰してくんな」それを聞いた家のもんも急いでにぎりめしを作り、おそるおそる「ごくろうさんでした」と礼を言つてかどのところへ置いとくんだそなだよ。朝起きてかどへ行つてみるとにぎりめしは一つもなかつたそな。『現代民話考10 狼・山犬・猫』<sup>(注4)</sup>狼報恩譚のなかでも、人が狼に対しても何かを与えるというのは、主に「送り狼」の話に多く見られる。この話のように、狼に夜道を送つてもらった札に人が何かを与えるというケースが多く、中には通り道の付近に棲んでいる狼が怖いので物を与えた、というものもいくつかある。人間が与えるものにどのようなものがあるのか『日本昔話通観』<sup>(注5)</sup>を参考すると、飯類（含小豆飯）一〇・魚六・餅五・塩五・米粒一・油揚げ一・（自分の）死体一・その他二となる。魚は岩魚や鮎など川魚となっていてものがあり、狼の獸性を考えれば魚はその嗜好に合いそうだ。また、飯類や餅も、狼の食性は別にして、人が用いるものとしては比較的理解しやすい。しかし、塩

が狼に与えられるというはどういう事だらうか。塩が語られる話を具体的に見ていく。

### 三、送り狼と塩

事例2、送り狼（奈良県吉野郡東吉野村杉谷）表一の18

送り狼つて、ずーっと遠い所から、山からついて、はいでもって後ろついてくんだ。ほで、一掴みの塩をやんだと。帰つてたら塩をやらなあかんねつて、家へ帰つて来て塩壺から塩を掴んでまいたんやろな。はいたらその塩を舐めて、もう危害も加えんで帰るということは、おじいさんから聞いたことはあるけどな。素直に帰つたつてな。塩が好きやと、一番。送り狼はそう怖いもんでもないといつてたな。

（話者 男性 八六歳 筆者聞き書き）<sup>(注7)</sup>

事例3、送り狼（福島県伊達郡）表一の1

昭和六年頃の話。ある山の麓の道を夜歩いていたら、山の神のお使いと言われる狼に出合った。口が耳の根元まで裂けており、肋骨が数えられるほど痩せていて、眼は燃えるように光っていた。「送り狼は家までついてくるよ」と言っていたがその狼もついて来た。「塩をなめさせると帰るし、何もやらぬと食いつく」と聞いていたから、塩を持ってきてなめさせたら、そのまま帰つて行つたのでほつとした。

このように、夜、山道などを人が通る時に後をつけてきて、家に帰り着いたところで塩をやると帰つて行ったというのがこれらの話に共通する点である。この話の類話は表一にまとめておいた。

送り狼の話は、北は岩手県から南は大分県まで分布しているが、ここでは塩が関係するもののみに限定している。例えば、二の話は群馬県山田郡に伝わるもので、狼のことを「山犬」あるいは「山犬様」といい、ある人が山道を歩いていたところつけられ、家に着いた時に波の花（塩の忌詞）とお散米をあげると山犬は食べて帰つたと語つている。

静岡県榛原郡に伝わる話（10）<sup>(注9)</sup>は少し特殊で、塩売りじいさんが、通り道にすんでいる狼が怖いので、いつも通る時に塩を一升巣穴の所に置いているのだが、ある時狼がそのおじいさんの着物の端をくわえて穴の中へ引きずり込み、自分は穴の蓋になるかのようにする。すると、まるで何千匹もの猛獸が通るようなものすごい地ヅナリがし、それが過ぎるとおじいさんを外へ出し、狼は何の危害も加えなかつたと語っている。狼がいつも塩をもらっていたのでおじいさんの危ないところを助けてやつたのだと話者は結んでいる。

狼が魔物から救ってくれるモティーフは他の狼報恩譚にも見られるものだが、人が狼に神秘的な力を見ていたことがこのことからもわかる。そしてこの静岡県の話での狼と人との繋がりは、つねづね塩売りがやっていた「塩」によるものだったわけである。

塩売りが塩を与えるというのは理解に難くない。しかし、他の話は必ずしも塩売りではない。例として挙げた奈良県吉野郡の話では、

「帰つて来たら塩をやらなあかん」とい、福島県の話でも「塩をなめさせると帰るし、何もやらぬと食いつく」と聞いていたことがわかる。また、山梨県東山梨郡（5）では狼は「塩が大好物」だといい、静岡県庵原郡（7）や奈良県吉野郡でも「狼は塩を好む」といっている。つまり、狼に送ってもらった時には、狼の好む塩を与える必要があると人々が考えていたことがわかる。

さらに、塩に関連するもので送り狼とは違うタイプの話に「イヌオトシ」<sup>(注1)</sup>の話がある。次に見てみよう。

#### 四、イヌオトシ

事例4、狼（奈良県吉野郡川上村）表二の6

よく鹿を取つて食べたが、鹿をとつたら姿を見せんけど、ちつとづか食べて二日位その近くで寝ている。私の父さんなど、ときどき狼のとつた鹿を拾うて帰つた。みんな持つて帰らず、少し取つてくるのであった。そんなときは、塩を持って行き自分の履いていたワラジにその塩をのせてその鹿の側へ置いてくるのだった。お礼のしるしである。

狼は人にはからなかつたが、自分の獲つておいた鹿をすっかり持つて帰られたりすると、怒つて家の近くまでやつて来て、やましく鳴き寝ることができなかつた。

（あしなが）<sup>(注12)</sup> 第50輯

類話は表二にまとめておいた。この話や表をみると、人間が狼の

残した鹿などをもつて来る時に、その一部や塩を置いてくれば、何も起こらない。しかし、もし全部そのままもつてきてしまうと事件が起こることがわかる。例えば、群馬県勢多郡（2）の話では、狼が捕つた鹿が落ちていたのを鉄砲打ちが拾つてきたところ、そのおかみさん、あるいは母親が死んだ時に埋めた死体を山犬（狼）が来て掘つて持つて行つてしまう。「山犬のとつた鹿はただとつては駄目だ。塩を礼に置いてくるものだ」と語るのである。また、奈良県吉野郡（12）では、狼の残した鹿を拾つて帰つたところ、狼がその人の家へきて小便を飲んだといつており、同じ吉野郡（7）でも、気の強い男が、まわりの人が止めるのもきかず、狼が食べ残した鹿を取つて帰る。すると、晩に狼が鳴いてしかたがないので、魚に付けるための塩を鹿のあつた所へ持つて行くと鳴きやんだといつていれる。このように、ただもつてきてしまふと狼が怒る、何か事件が起ころる、と、狼に塩をやることを必然的にしている。すなわち、狼が倒した獲物をもつてくる時には、それと交換に塩を与える必要があると人々が考えていたことがわかる。

自由に獵ができるなかつた時代や、狩りをする術を持たない人々にとって、こうしたイヌオトシは重要な動物性蛋白源となつただろう。長野県伊那地方では、イヌオトン<sup>(注13)</sup>が最も多く出る季節は四月から五月にかけてであるといわれている。人里近くや山中で拾うこのイヌオトシに対しても、狼が好む塩を礼に交換する必要性が説かれているのである。

このように、狼に何かしてもらつた時には、その行為に対しても人間が狼の

間側がそのままにせず、何らかの形で札を表したということがわかる。

一方が一方に対し常に利益をもたらすのではなく、何かを受けたら受けた側がもう一方に返礼をする人間社会の仕組みがここに認められる。この互酬性を考える時、社会的な平等理念に基づき、互いに均衡を保とうとすることが多いことからも、人が狼に送つて

もらつたり、獲物を分けてもらつた時に塩で返礼するということは、狼を対等なものとして人が見ていたことになる。人間社会以外の自然界の動物である狼をも、同じように考えていたわけである。

また、送り狼への接し方をみると、邪険に扱うのではなく、塩を与えるときには紙に包んだり、皿にのせるなど丁重に接しており、相手を尊重した態度を取っていることがわかる。これが神として見ていた名残なのか、神として見るに至つた根本的な考えによるのかはわからないが、話の中で、人が狼を畏れ、対等もしくは相手を尊重した態度で接していたことがわかる。

## 五、狼と小便

狼の塩好きに関連する伝承に、「小便」にまつわるものがある。

事例5（奈良県吉野郡東吉野村）表三の7

あれは、あのう、狼ってゆうやつはな、人間の小便でも飲む、あれは質のもんや。

塩気が好き、塩気が好いてな、便所の小便飲むねん、狼ってゆうやつは。ほんであ送り狼つてよう聞くわな。わしゃ子供の時

分に聞いたそれはな。

〔東吉野の民話<sup>(注16)</sup>〕

内容は、山小屋などに狼が小便を飲みに来る、それは狼が塩氣を好むからだというものである。この小便についての伝承は、表三にまとめておいた。

内容をみると、例えば天川村（9）では山小屋の前に置いてある小便桶の小便が一夜のうちに無くなっていることがよくあり、狼はよく小便を飲むものであるといつている。また、奈良県果無山脈（13）では九月の夜、炭焼き小屋のすぐ近くまで狼が来て吠え立てる、すると翌朝小便桶の小便が半分ぐらいに減っていたといい、狼は塩分を取るために便所に来るのだと伝えてている。これらの伝承をみると、小便是塩氣があるから狼が飲みに来るので人々が考えたことがわかる。狼と塩について考える際、この小便にまつわる伝承は無視できない。

## 六、狼と塩から

これまで見てきた伝承の中で、狼は「塩好き」であると捉えられていたが、果たして事実なのだろうか。これには少々疑問が残る。

森林オオカミと北極オオカミとを各四頭飼育している、北海道在住の桑原康生氏の示唆によると、これまでの四年間は特に塩分を与えたことは無いとのことだった。一週間のうちに二回、オオカミに塩と塩水を与える実験をお願いしたところ、結果は、好奇心の強い

一頭が口にしたくらいで、他のオオカミは体をなすり付けるだけであったという。その好奇心旺盛なオオカミは「と」と、一回目、塩を口にすると奇妙な顔付きをし、二回目には泡をふいて戻していた。そうである。他のオオカミは口にすることもなく、特に塩を好む様子は無いということだった。

肉食獣であるオオカミは、動物の内臓や骨髓から塩分を摂るため、草食動物ほど直接的に塩分を摂取する必要はないと思われる。小便には塩分の他にもミネラルが含まれているので、それを欲して飲みに来たということを考えられる。ただ、資料四の「その他の伝承」

に載せた、秋田県や和歌山県の伝承では、「狼が沢の白い石（塩水）を舐めにきた」とか、「海水を舐めに海へ通つた」とも伝えており、野生のオオカミが何らかの理由で塩分を直接摂ることがあった可能性も否定できない。しかし、その際も、塩そのものを舐めるというより、塩水を舐める程度だったものと思われる。

正確な理由はともかくとして、狼が好んで飲みにきた小便や海水に塩気があるため、「狼は塩好きである」と人々が解釈し、そのような伝承が形成されていったと考えられる。あるいはまた、山の民の塩好きなどから連想して、山に棲む獸ゆえ、塩が乏しいだろうと人々が考えたとも推測できる。

塩は、数ある食料の中でも、人間にとって欠かせぬ生活に根差したものである。特に、山に生きる人々にとっては手に入りにくい貴重なものであり、困窮時にはいろいろばたに敷いてあるムシロを食べて塩分を補給したことさえあるという。そのような大切な塩を狼に

与えるという行為は注意する必要がある。また、説話の中で、他の野生動物と人との間に塩が語られることは今のところ認められない。つまり、狼に対してだけ塩が与えられているのである。このことは、狼が他の動物とは異なる特別な存在だったこと、また、狼と人との繋がりが、より深いところにあることを感じさせる。

説話や伝承の中に残された狼と塩との結び付きは、同時に、人と狼との結び付きの深さを暗示しているといえる。

## 六、おわりに

一度目に吉野の里を訪れたときには、日も暮れて車から降りると辺りは真暗闇であった。聞こえてくるのは川の流れの音だけで、辺りに立ち込めている闇に、言い知れぬ不安を感じたことを覚えていた。

夜の山道を歩いたかつての人々が、後ろからつけてくる狼を、時には恐れ、また、時にはトギのように思つて時を共にした時代が確かにあった。

話はあくまでも話であり、そこに語られるものがすべて事実とはいえないかもしれません。それは事実から生まれた観念の世界である。

しかしながら、全くの虚構とも言いつ切れない。世の中の急激な変化に伴い、人の生活も大きく変わってきた。外国との交流により多大な影響を受けただろう。享保の狂犬病の流行で、狼観も大きく変容したものと思われる。が、それでも西洋や中

国の説話に登場するような狼だけでなく、これまで見てきたような、人と共に生きる狼が話の中に生きていたのである。

狼から山道を送つてもらつたり、獲物を分けてもらつたときには必ず返礼をするというように、人は、狼に対して対等もしくは敬畏・恐怖の念を持つて接していた。それは、狼に対する二つの感覚、すなわち恐怖心と、一方では守護してくれる、あるいは恩恵を施してくれることへの親しみとを、日本人が感じていたことに裏打ちされている。また、小便や海水（塩水）などから狼は塩好きであると解釈し、人間にとつて欠かせぬ貴重な塩を与えることによって、狼とのバランスをとつていたといえる。そして、それほど狼が他の動物とは異なる特別な存在だったことが、説話からは読み取れた。狼

と塩との繋がりは、また、狼に対して日本人が特別な感覚を抱いていた時代が長かったことを物語ついている。

### 注

- 1、このような問題は日本固有のものではなく、筆者が三年間滞在したスウェーデンでも同様であった。人口密度は日本とは比較にならないほど低いのだが、クマやオオカミの生息域と人の居住地とが近付くにつれ、また、個体数の増加に伴い、接触の問題が生じて来ていた。
- 2、一九九三年にスウェーデン西部のある地域で行つた狼についての人々の意識調査では、若者に比べて年配者の狼への嫌悪感の強さが印象的だった。家畜を襲われ、狼と闘つた親から狼の残虐性

を伝える話を聞いて育つた後者の世代には、狼は悪者という意識が色濃かった。これについては機会を改めて報告したい。

2、狼の絶滅説については、柳田國男の「狼のゆくへ」、今西錦司の「動物記」、平岩米吉の「狼——その生態と歴史——」があり、それらについては更に塚本学『江戸時代人と動物』に詳しい。また、松山義雄の『狩りの語り部——伊那の山峡より』も見逃せない。

3、拙稿「狼と日本人」（民俗と歴史の会「民俗と歴史」第22号所収  
一九九〇）。

4、松谷みよ子編『現代民話考10狼・山犬・猫』（一九九四 立風書房）に拠る。

5、稻田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第3巻（四一五頁）・  
8巻（二二一）・10巻（四八九）・12巻（五一・五三・五四・五  
六・五七）・13巻（一三四・一九四・一九五・一九六）・15巻  
(八三)・18巻(三〇九)・19巻(三〇一・三〇四・三〇五)・  
21巻(二三七)・22巻(二三三)・23巻(二六〇)(一九七七八  
六 同朋舎出版)。

6、小豆については、狼が子を生んだときには小豆飯あるいは赤飯を炊いて持つていく「狼の産見舞い」の儀礼が、関東地方を中心見られる。小豆は山の神に供える風もあることから、山の神の使いであるといわれる狼に供されるとも考えられる。埼玉県秩父郡の三峯神社では、御眷属であるお大きさま（狼）に赤飯を供える「御焚上」の神事が現在でも行われている。また、小豆飯は狐の

好みのものとしても説話の中で語られている。

7、一九九六年三月二九日 奈良県吉野郡東吉野村杉谷にて採集。

8、前掲書注4

9、カッコ内の数字は表の番号に該当する。以下同様。

10、このことについては、大村和男氏が塩交易の原型を示すものと

して、山犬（狼）に山の民のイメージを重ねて見ていて興味深い  
が、筆者はあくまでも狼ととの関係に絞って考えてみたい。

11、この「イスオトシ」というのは狼が食べ残した鹿や猪などを意味し、地域によっては「狼食い」といつたりもするが、イスオトシと呼んでいる所が多いので、ここでは「イスオトシ」として統一しておく。

12、仲西政一郎「奥吉野八幡平聞書」（山村民俗の会編「あしなか」  
第50輯所収 一九五六）。

13、松山義雄『狩りの語り部——伊那の山峡より——』（一九七七  
法政大学出版局）一四二頁。

14、「狼に何かをしてもらった」というのはあくまでも人間側の解釈である。自分のテリトリーに入つてくるものを好奇心から付けてくる狼の習性を、人が「送つてくれている」と考えるようになったのである。これについては前掲論文注3に述べておいた。

15、J・ファン・バール著 田中真砂子・中川敏訳『人類学ゼミ  
ナール13 互酬性と女性の地位』（一九八〇 弘文堂）参照

16、竹原威滋・丸山顯徳編『東吉野の民話』（一九九二 東吉野村  
教育委員会）所収「送り狼」の一説に拠る。

17、分布に少し偏りがあるが、これは最後まで狼が生息していた奈良県吉野郡の辺りでは、比較的近い時代まで人々が狼と接触していたこと、また、林業などの山仕事で山に入ることが多く、その機会が多かつたためかと思われる。

18、小便については別に次のような伝承もある。高知県土佐郡本庄村では、山で山犬につけられたとき、路傍の草を結び、小便をしきかけておくとよいといつたり、同じ土佐郡土佐山村でも、山犬は人間の小便がかかるとしごれるものだが、反対に山犬の小便が人間にかかると人間のほうがしごれるものという。そのため、大山を越えるときには笛を折つて小便をしかけておき、これをかざして歩くふうがあったと伝えている。小便は、狼が好んで飲むものかと思えば、逆に狼除けのために使う地域もある。

桂井和雄『土佐の海風——桂井和雄土佐民俗選集』第三卷  
（一九八三 高知新聞社）参照。

19、文献上、「狼の塩好き」について記されているものでは、根岸鎮衛の『耳袋』（天明～文化年間）まで遡ることができる。

20、オオカミが獲物を倒したときに、真っ先に内臓を食べるについてには数多くの報告がある。

（付記）本稿は、平成八年度日本口承文藝學會大会において発表し草稿をもとに加筆修正したものである。席上、諸先生方より貴重な御教示を賜った。深く感謝申し上げる。  
(ひしかわ・あきこ／國學院大學大学院)

表一の見方 (表一、表二の並び回送)。

伝承地

名称……狼が説話中の迷ひ聲がねいこぬか

場所・状況……説話の舞台や背景、または人物の行動

・狼の行動

・人間の行動

・話の展開

・備考……特記欄が述べてこないへ

表一 送り狼

伝承地	名称	場所・状況	狼の行為	人間の行為	辰 間	備 考	資料名
1 福島県伊達郡	山の神の お使い・ 狼・送り 狼	山の麓の道 についてくる	塩をなめさせる	そのまま帰る	送り狼は塩をなめさせると帰 るし何もやらぬと喰いつく	現代民話考10 狼・山犬 猫 (松谷みよ子編) 1994	
2 群馬県山田郡大間々町	山犬(様)	山道 つけられる	波の花・お散歩	食べて帰る	前で転がるヒ一口に喰われて しまう。夜12時過ぎると喰わ れる。犬より大きいなり	大間々町の民俗 (群馬県教育委員会編) 1977	
3 群馬県碓氷郡松井田町	送り犬・ 迎え犬・ 山犬(様)	ついてくる(送り 犬)	塩を出してやる		送り犬、迎え犬は人間に喰い つかないが、喰う犬は2、3 度頭の上を飛び越してから喰 いついてくる。夜道にキレモノをはなすな。タバコの火	松井田の民俗一坂 本・入山地区(群 馬県教育委員会 編) 1967	
4 東京都日野市	山犬・御 岳様のお 使い	守屋家 夜 くる	守るようについて 鎌口「帰んな」	去る	物日にこわめしと好物の塩を 置く習慣あり	現代民話考10 狼・山犬 猫 (松谷みよ子編) 1994	
5 山梨県東山郡勝沼町	送り狼・ 山犬	くぬぎ等の つけてきて戸間口 ですわりこみ、何 かくれるのを待つ	一握りの塩(皿 か紙の上)	きれいに舐め姿を消す	塩が大好物。「転べばオオカ ミに喰われるぞ」といい、転 ばぬよう、後に向かないよう にしながら帰る	勝沼町誌(勝沼町 誌刊行委員会編) 1982	

伝承地	名称	場所・状況	狼の行為	人間の行為	展開	備考	資料名
6 長野県松本市	送り犬	塩売り	送ってくれる	石の上に塩5合	袖をくわえて引き、數 陰で上にかぶさり隠す →狼が2、30匹やって 来るが助かる		小県語民譜集 (小山真夫編) 1933
7 静岡県庵原郡 (現静岡市)	狼	炭焼き櫛 時間	毎夜ついてくる	札に塩を五合紙 に包んで与える	(次の夜) 猪の片股→ 赤飯とごま塩→数年間 押れて送る	倒れでもすると直ぐに喰いつ く。狼は塩を好む	静岡県伝説昔話集 (静岡県立女子師 範学校内郷士史研 究会代表森田勝 編) 1934
8 静岡県阿佐郡 (現静岡市)	やめいぬ		送ってくれる(姿 は見えない)	「ここまででいい い」翌朝叶えし たところに塩を 持っていく			砂地の製塩(大村 和男) 静岡県海の 民俗誌—黒潮文化 —(静岡県民俗芸 能研究会著) 所収 1988
9 静岡県周知郡	狼・山犬 ・お犬様	山夜	子どもを多く引き 連れて出てきて飛 びかかるうとする	「食塩をやるか ら助けてくれ」	食塩を食べてそのまま 帰る		静岡県伝説昔話集 (静岡県立女子師 範学校内郷士史研 究会代表森田勝 編) 1934
10 静岡県榛原郡 御前崎村	狼	塩売り爺さん	(通り道にすんで いる)	(恐ろしいの 中へ引きずり込み自分 は穴の蓋に→ものすごい 地ヅナリ→くわえ出す	着物の端をくわえ穴の に感じて、お爺さんの危ない 所を助けてやった	狼が、いつもお塩を貰った恩 (静岡県立女子師 範学校内郷士史研 究会代表森田勝 編) 1934	
11 静岡県浜松市	(大きな)狼・狼様	山家の人 山日暮れ	口を大きく開けて 突進してくる→食 付いてくる→鉢 一杯の塩→口の 何かはさまっている	家にお塩の花→ (数日後) 帰りが遅く なった時送ってくれる			静岡県伝説昔話集 (静岡県立女子師 範学校内郷士史研 究会代表森田勝 編) 1934

伝承地	名称	場所・状況	狼の行為	人間の行為	展 開	備 考	資料名
静岡県浜松市	山犬		群がって付いてくる時	「お塩を一升やくれるから里まで送つて」	口の中の大きな歯を抜く	「転ぶと喰うぞ」という。お塩をやらないと後でたまる	静岡県伝説昔話集(静岡県立女子師範学校内郷土史研究会代表森田勝編)1934
静岡県浜松市	狼	(情深い)旅人山道夕暮れ	大きな口を開いて走つて来る→何か顛む様子	(ある夕方)送つてくれる(他の僧からの告げ)→家・鉢一杯のお塩の花→ペロリと舐め帰る	歯でさえあんなに立派に恩を返すのか	静岡県伝説昔話集(静岡県立女子師範学校内郷土史研究会代表森田勝編)1934	
愛知県南設楽郡長篠村(現鳳来町)	山ノ犬・オイヌサマ		送る	門口へ塩	姿を現して食べた		早川孝大郎全集第4巻(宮本常一・宮田登編)1974
滋賀県坂田郡伊吹町	狼・送り		送る→(家の前)帰ろうとしない	舐めた後喜んで帰つて	頭の上を跳び越えては送つていく。転んでも一服と言えば見逃してくれる	伊吹町の民話(伊吹山麓口承文芸学術調査団編)1983	
滋賀県坂田郡伊吹町	狼	坂・秋 夕暮れ	懲かれる	舐めた後喜んで帰つて書んで塩をなめる	書んで塩をなめる	伊吹町の民話(伊吹山麓口承文芸学術調査団編)1983	
滋賀県東浅井町	狼・送り	森・夜中	後ろにつき、時々頭の上を飛び越える(時には2、3匹で)	塩を一握り戸の外に撒いてやる	狼は人間を跳び越え砂落とす。後ろを向くとやられる	滋賀県湖北昔話集(國學院大學説話研究会)1985	
奈良県吉野郡東吉野村杉谷	狼・送り	山	ついてくる	一握みの塩	舐めて素直に帰る	送り狼はそち怖いものではない。塩が一番好き	筆者聞き書き 1996・3月

伝承地	名称	場所・状況	狼の行為	人間の行為	展 開	備 考	資料名
19 奈良県吉野 郡東吉野村 小栗西	狼・送り	山道	ついてくる	(ついて来たと わかったら) 塩 を門の所にひと つまみ播いてや る	舐めて得心して帰る	狼は塩が好きらしい。狼が人 を襲うて殺すとか食べるとか いう話は聞いたことない	筆者書き 1996・7月
20 奈良県吉野 郡東吉野村	狼		送って来る	塩(撒む)	喜んで帰る	絶対後ろを向いたらあかんね。 けつまずいたりひょろつくと 飛びつかれる	東吉野の民話(竹 原威徳・丸山顯徳 編) 1992
21 奈良県吉野 郡東吉野村	送り狼	山中	頭上を何度も飛び 越える	大きな声を立て る	逃げるがまた来て塩2、 3俵も取られる	塩の付いた網や物を持って夜 歩きはしないこと	日本狼物語(岸田 日本出男) 吉野風土 記第21集(花岡大 学編) 1964
22 奈良県吉野 郡十津川村	オクリオ オカメ		振り向くとつい てくる	鉄砲を空へ向け て一発		叔母:「怖いこと無い、他のもの のが災いせんよう守ってくれ る」塩を舐めさせたらよい、 ちゃんと札をしないと山で あつた時に裏いわかって来る と信じられていた	林宏十津川郷採訪 録民俗第2巻 1993
23 和歌山県伊 都郡かつら ぎ町	狼・送り	七越時 遅く 夜 くる	家の門までついて くる	札を述べ、家の 中にあるだけの 塩を表へ投げ出 し、たらいに水 をくむ。「食べ て去んでお れ」	塩はきれいになめであ る	きのくに民話叢書 2紀ノ川の民話伊 都篇(和歌山県民 話の会編) 1982	
24 愛媛県宇和 地方	山犬	夜	送ってくれる	戸口の石の上に 塩・小豆飯		宇和島帶の民俗 (和歌森太郎編) 1961	

表二 イヌオトシ

伝承地	名称	場所	人間の行為	展 開	備 考	資料名
1 栃木県上都 賀郡栗野町 使い	山犬・三 道	倒して置いてある鹿 猪をも らってくる。代わりに塩とその 首			驚かしたり悪さをするとよく ない。子を産んだときは小豆 飯を洞穴の入り口に	統狩獵伝承研究 (千葉鶴爾著) 1971

伝承地	名称	場所	人間の行為	展開	備考	資料名
2 群馬県勢多 郡東村	狼・山犬	鉄砲打ち てくる	落ちていった狼がとった鹿を拾つ てくる	おかみさん（或いは母）の 埋けた死体を山犬（狼）が 来てほってもっていく	山犬のとった鹿はただとつて は豚目。塩を礼においてくる ものだ	勢多郡東村の民俗 (群馬県教育委員会 事務局編) 1966
3 長野県伊那 地方小渋谷	山犬		犬落としを拾い、塩と鹿肉の一 部を残してくる		山犬は塩が好き。残してこな いと拾得者の家へ夜分荒び込 んでくる	狩りの語り部—伊那 の山峡より(松山義 雄著) 1977
4 静岡県磐田 郡佐久間町	山犬		イヌモド リ(切り 通しのよ うな所) 鹿の皮を剥ぎ肉に塩を塗る(イ ヌオトシ)「皮をもらって行く よ。塩の付いた肉を食べてく れ」		イヌオトシを無断で持ち帰る と山犬が怒るという。山犬は 塩好きなので塩を与えるのだ	静岡県史資料編25 民俗3(静岡県編) 1991
5 和歌山県東 牟婁郡本宮	狼	明治20年 代	塩を持っていって狼の獲物をイ イだけもらってくる		狼は三日ほどかけて獲物を食 べる	きのくに民話叢書1 熊野・本宮の民話 (和歌山県民話の会 編) 1981
6 奈良県吉野 郡川上村	狼		狼のとった鹿を少し取つてくる。 (札のしるしとして塩を持って いき)自分の履いていったワラ ジに塩をのせて鹿の側へ置く		狼は人にはかからない。自分 の鹿をすっかり持つて帰られ たりすると怒って家の近くまで來てやかましく啼く	奥吉野八幡平聞書 (仲西政一郎) あし なか第50輯(山村民 俗の会編) 所収1956
7 奈良県吉野 郡天川村	狼	川 強い男	氣の 鹿 食い残し(狼食い)の肉を 取つて帰る	(晩) 啼いてしかたない→ 魚に付ける為の塩を元の所 へ→啼き止む	狼の話(仲西政一 郎) あしなか第80輯 (山村民俗の会編) 所収 1962	
8 奈良県吉野 郡天川村	狼		狼が倒したらしい鹿を拾つて帰 る	塩を一掴みおいて来れば最初 からシユウタンには来ない、 がしなくなる	吉野西奥民俗探訪録 (宮本常一著) 1942	
9 奈良県吉野 郡天川村	カメ・狼		猪・鹿 大オトシ(よく見かけ た)をもらい、礼に塩を置いて くる	カメは聲つものではない。オ トシをもらつくるとアタン をするからお礼に塩をおいて くるものだ	鶴狩獵伝承研究 (千葉健爾著) 1971	

伝承地	名称	場所	人間の行為	展開	備考	資料名
10 奈良県吉野 郡天川村	狼	河原	鹿 猿が追い殺したオトシ肉（よく落ちていた）を塩を置いてもらってくる			統狩獵伝承研究（千葉徳爾著）1971
11 奈良県吉野 郡天川村	オオカメ	シモノカ ワラ	「塩を置いておくからこの鹿を持ってゆくぞ」とことわり（鹿を）持ってくる			林宏十津川郷采訪録 民俗第2巻 1993
12 奈良県吉野 郡十津川村	狼		狼が残した鹿を拾って帰る（狼は半分残して帰っていく）	家へ来て小便を飲む		日本猿物語（岸田日出男）吉野風土記第21集（花岡大学編）1964
13 奈良県吉野 郡十津川村	カヌ・オ ヤカメ・ ヤマタロ ウ	谷	落ちて死んでいた四つエダ（枝）を持ってきて食べる		いくらか残しておくと良いと言うが昔は必ず塩を置いた	林宏十津川郷采訪録 民俗第2巻 1993

表三 小便

伝承地	名称	場所	狼の行為	備考	資料名
1 三重県松阪市	送りオオカ メ		戸口横の小便たごへちょいちょい塩気をぬめに来る	オオカメというやつは送ってきた人を飛び越えると食われるので、下を向いたりしゃがんではいけなかつた	松阪市史第10巻資料篇 民俗（松阪市史編さん委員会編）1981
2 奈良県守陀郡	狼	山奥の一軒家	(夜)ついてくる。（翌朝）庭の桶の小便が飲み干されている	こけたらかぶりつく・火を恐がる・塩氣を好む	現代民話考10 狼・山犬猫（松谷みよ子編）1994
3 奈良県吉野郡	狼	家の外の肥桶	小便を飲みに来る	小便是塩氣が多いから飲みにきたんやと思う	筆者聞き書き 1996・3月
4 東吉野村鶯家 口			家の外の肥桶	小便是塩氣があるから塩分を取りたいのだろう	筆者聞き書き 1996・3月
5 奈良県吉野郡 東吉野村杉谷	狼		小便を飲みに来る	塩が好きらしい	筆者聞き書き 1996・7月
	送り狼	山道	ついてきて、人が小便をするとそれをおねぶる（なめる）		

伝承地	名称	場所	狼の行為	備考	資料名
6 奈良県吉野郡 東吉野村	送り狼		小便を飲む	塩気が好き	東吉野の民話（竹原威滋・丸山顯徳編）1992
7 奈良県吉野郡 東吉野村	狼	山小屋	小便を毎晩飲みに来る	「怖い、どんぞせなしやあない」 →（翌朝）小屋の前に大きなか猪	東吉野の民話（竹原威滋・丸山顯徳編）1992
8 奈良県吉野郡 大淀町	狼	松煙小屋の門先	小便桶、飲みに来る		日本狼物語（岸田日出男）吉野風土記第21集（花岡大字編）1964
9 奈良県吉野郡 天川村	狼	山小屋	家の前的小便桶の小便、一夜のうちに無くなっていることがよくあった	狼は小便をよく飲むもの	吉野西奥民俗探訪録（宮本常一著）1942
10 奈良県吉野郡 大塔村	狼	出小屋	小便をために来る	小便是溜めぬもの。小便好きで飲んでしまう	吉野西奥民俗探訪録（宮本常一著）1942
11 奈良県吉野郡 十津川村	オオカメ	山小屋		塩氣を好む	林宏十津川獵採訪録民俗 第1巻 1992
12 奈良県吉野郡 十津川村	オオカメ		ダメ小便を吸いに来る	小便を飲んだ狼は人にかかってくる	林宏十津川獵採訪録民俗 第2巻 1993
13 奈良県果無山 脈南麓	狼	炭焼き小屋	9月（夜）すぐ近くに来て鳴えたてる	翌朝小便桶の小便が半分ぐらいに減っている。狼は塩分を摂るために便所に来る	樹木と生きる一山びとの民俗誌（宇江敏勝著）1995
14 三重県熊野市 湯の谷	狼		戸外の壺から小便を飲んで行く	家の中に小便溜を作った	牟婁地区山村習俗調査報告書 三重県文化財調査報告書第13集（三重県教育委員会編）1971
15 和歌山県伊都 郡高野口町	狼		小便飲みにくる	おやっさんから「狼くる、狼く る」とつよいわれた	きのくに民話叢書2紀ノ川 の民話伊都篇（和歌山県民話の会編）1982
16 香川県大川郡 長尾町	狼さん		（便所の）小便桶が翻起きてみると空になつてゐる	狼さんがゆうべ来て食べたのだと いうので大騒ぎになる	全国音話集成32 東讃岐音話集（武田明・谷原博信編）1979
17 愛媛県石船山	狼	山小屋	小便を飲みに来る	小便樽の底を抜いておいても樽を舐めに来ることあり	忘れられた日本人（宮本常一著）1984

#### 四、その他の伝承……狼と塩……

(⑥・⑦の伝承は静岡県編『静岡県史資料編』25民俗3に拠る 一

九九一)

①秋田県仙北郡 オイノ／明治の中頃までは夜中になると、オイノ

が（塩分を含んだ馬泉沢の）白い石を食べによくやつてきたとい

う。沢の塩をなめにきたのである。それで非常に危険な地帯だっ

た。（太田雄治『消えゆく山人の記録 マタギ』一九七九）

②群馬県桐生市 ヤマイヌ・ミツミネサマのお使い・オイヌさま／

塩、米を入れておく箱をかじった。（群馬県教育委員会編『桐生市

梅田町の民俗』群馬県調査報告書第一二集 一九八〇）

③神奈川県 狼／狼に出会つたら、「お前の好きな塩をやるから助

けてくれ」という。（亀井千歩子『塩の民俗学』一九七九）

④神奈川県 お犬様／武藏御嶽山からお犬様（狼——大口真神）の

お札を借りて来て、盜難除けにしている家では、これに塩を供え

る。

⑤神奈川県 狼／狼を祀つてある社へ塩を供える時、青竹の先へつ

けて差出すと、竹の先が笄のようになる。これは狼が噛むからだ

という。（④・⑤の伝承は渋澤敬三編『塩俗問答集』に拠る 一九

六九）

⑥静岡県榛原郡本川根町 山犬／山犬の声を聞いたら家の前へ塩を

出しておけ。

⑦静岡県榛原郡本川根町 山犬／山の中での使った箸が喰いちぎ

られていたら氣をつけよ、山犬が塩をほしがっているからだ。

之を与へる時は害をなさなかつたといふ。

⑧静岡県榛原郡上川根村（現本川根町） 山犬／塩を好むと云ひ、

の持ち運び忌む。

⑨静岡県磐田郡佐久間村（現佐久間町） 山犬／大変お塩が好きな動物

だから、若しも山犬に襲はれた時には塩をくれて置いてから逃げ

よと云はれて居る。

⑩静岡県磐田郡掛塚町（現竜洋町） 山犬／大変お塩が好きな動物

だから、若しも山犬に襲はれた時には塩をくれて置いてから逃げ

よと云はれて居る。

⑪静岡県静岡市 狼／夕暮れになつてから、お塩を買ひに行つては

ならないと云はれたさうである。これは狼がとてもお塩を好むか

らしさうである。（中略）何か火をつけて行けばよいのだといふ。

そして家に帰り着いたら、お塩を一つかみ門口にまいてやるのだ

さうである。

⑫静岡県静岡市 山犬／たいそう塩が好きださうだ。自分のたつた

一匹の子供でも塩一升とかへる位ださうだ。であるから、夕方暗

くなれば、塩を買ひに、又借りに行かないやうにしてゐる。どう

しても必要な場合には、その器の中に火を入れて行くといふ。つ

まり火で山犬を防ぐのださうだ。（⑧・⑫の伝承は静岡県立女子

師範学校内郷土史研究会代表森田勝編『静岡県伝説昔話集』に拠る 一九三四）

⑬静岡県引佐郡三ヶ日町 山犬／塩をあまりなめると、あたかも山

犬のようだといふ。

（渋澤敬三編『塩俗問答集』一九六九）

(14) 岐阜県美濃地方揖斐谷 山犬／山畠で仕事をしていると折々出来て、おいてある鍔の柄をねズッた。塩をとるために、人を噛むことはないという。

(15) 千葉徳爾『狩獵伝承研究』一九六九）

(16) 和歌山県新宮市 塩見峠 狼／狼は塩をほしがる動物なので、日に一度海水をなめるために峠を越えて海へ通つたという。狼街道の名。

(野本寛一『熊野山海民俗考』一九九〇)

(17) 岡山県美作 狼様／供物は塩 信者は本殿の後ろの穴に向かって塩、又、神殿の岩に向かっても塩を撒く（奥御前宮）。（和歌森太郎編『美作の民俗』一九六三）

(18) 高知県土佐郡本川村 山犬（さん）／山で猟のあるときは、山犬が通るといい、見かけぬ毛色の犬が走つたりすると、山犬さんと考えてよいという。そんなときには、山犬が猪などを追いたてるもので、そんな猪を取つた場合には、焼き塩を作り、岩の上などに供えて置くものという。

(19) 高知県土佐郡本川村 山犬／山犬は月に一度海辺に出て、塩気を口にしなければならぬといい、千匹連れで海に向かって走ることがあるといい、焼き鹿というものを作つて、木の枝に串刺しにして置くふうがあつたともいう。これは塩気を求める山犬のために、鹿の肉を塩焼きにしたもので、朝になると必ずなくなつていたといふ。(20)・(21)の伝承は桂井和雄『土佐の海風』に拠る 一九八三)